SJF 技術の変遷 2013 年

2000 年（平成 12 年）

JF 研究会設立

関節機能障害（joint dysfunction）の治療（症候の原因である関節機能障害の治療法確立）

2001 年（平成 13 年）

仙腸関節治療技術に潤滑理論を取り入れ、腸骨の操作を主とした技術に変更

関節潤滑機構を運動科学の中に位置づけし、関節内運動力学（arthrokinetics）とした

膝の関節内運動（track）に基づいた治療法を開発

肋骨の関節（肋横突関節）に対する治療法を開発

関節の接近技術を slack から close に変更

2002 年（平成 14 年）

むちうち症患者の頸部回旋制限がＣ1/2 椎間関節機能障害由来のものと判明

（動きが大きい関節にも関節機能障害が多い→腰仙関節の治療技術を開発）

仙腸関節からの脱却　比較研究の結果、腰仙関節の治療に変更

2003 年（平成 15 年）

拘縮（contracture）の治療として接近延長法（close lengthening ）を開発

2004 年（平成 16 年）

理学療法雑誌に「関節拘縮に対する SJF の効果」投稿

2005 年（平成 17 年）

筋の収縮活性化の技術として速い逆構成滑り法（quick inverse sliding）を開発

同時に拮抗筋の不活性化の技術として速い構成滑り法（quick direct sliding）を開発

JF の名称を SJF に変更

2006 年（平成 18 年）

治療後の即効性より治療的検査法確立（有痛性疾患の確定診断が治療的診断法）

2007 年（平成 19 年）

L5/S1 治療法 au, pd を ds, us に変更（3D-CT 像により運動の中心点が椎体側に存在）

筋再教育の技術として自動介助運動を伴う介助構成滑り法を開発

筋力増強の技術として抵抗運動を伴う対向構成滑り法（Counter sliding）を開発

SJF 治療技術の名称を統合整理、変更

2008 年（平成 20 年）

従来の神経筋再教育を運動（器）再教育（神経筋関節再教育）に修正することを提唱

シュプリンガージャパンより「SJF 関節ファシリテーション」第 1 版出版

2009 年（平成 21 年）

主動作筋と同時に拮抗筋を活性化する速い逆構成半滑り法

（alternating quick inverse semi-sliding：A-quick）

（bilateral quick inverse semi-sliding：B-quick）を開発

動作促進法を開発（SJF 効果を動作の自立に向けた訓練法として利用）

2010 年（平成 22 年）

呼吸障害に対して第 11 肋椎関節に対する q.i.s.で横隔膜（吸気）の活性化技術を開発

その他肋骨の関節に対する治療法を開発

q.i.s.による関節受容器への刺激が脳に達する実験

2011 年（平成 23 年）

L5／S1 治療に asymmetrical downward sliding （ads） 技術を開発

2012 年（平成 24 年）

筋線維タイプ別治療的運動技術を開発（typeⅡx に対する刺激法）

臨床における SJF 技術の使用手順を確定

2013 年（平成 25 年）

個別筋線維の収縮活性化技術を開発

丸善出版社より「SJF 関節ファシリテーション」改訂第 2 版出版

シュプリンガージャパンより「４D - CT で解き明かす　関節内運動学」編集出版

2014 年（平成 26 年）

腰仙関節治療に自動介助法を使用（効果を確認）

2015 年（平成 27 年）

運動科学の分類表を改定

2016 年（平成 28 年）

コースノートの英文訳完成

2017 年（平成 29 年）

ぎっくり腰の治療効果確認（200 例超）

機能障害に対する PTOT の優位性について決定